

平成 27 年度 英語力調査結果

外部検定 未受験者は 中学 6 割 高校 5 割

「英検」受験者が圧倒的。それでも中学 3 割 高校 2 割

旺文社 教育情報センター 29 年 1 月 11 日

平成 27 年 6～7 月に行われた文部科学省「英語教育改善のための英語力調査」の学力に関する速報値は、昨年 2 月に既報であるが、あわせて行われた生徒、学校、教員に対してのアンケート集計結果がこの度、発表された。

高等学校（第 3 学年）、中学校（第 3 学年）共に、特徴的な項目を抽出して紹介する。

◆アンケート集計結果から（高等学校）

- ・英語の学習が「あまり好きでない」「好きでない」と回答する生徒の割合は 5 割以上。
- ・高校生のおよそ 9 割が、英語に関するイベントに参加したことがない。
（イングリッシュキャンプ、スピーチ、ディベートなどの大会、留学など）
- ・外部検定を受験したことがない生徒が 5 割を越えている。
- ・授業以外で英語に接する時間が 30 分未満の生徒が 5 割以上。
- ・授業において「話す」「書く」活動の割合は、「聞く」「読む」活動に比べて低い。
英語によるスピーチやディスカッションを行っているのは 3 割程度。

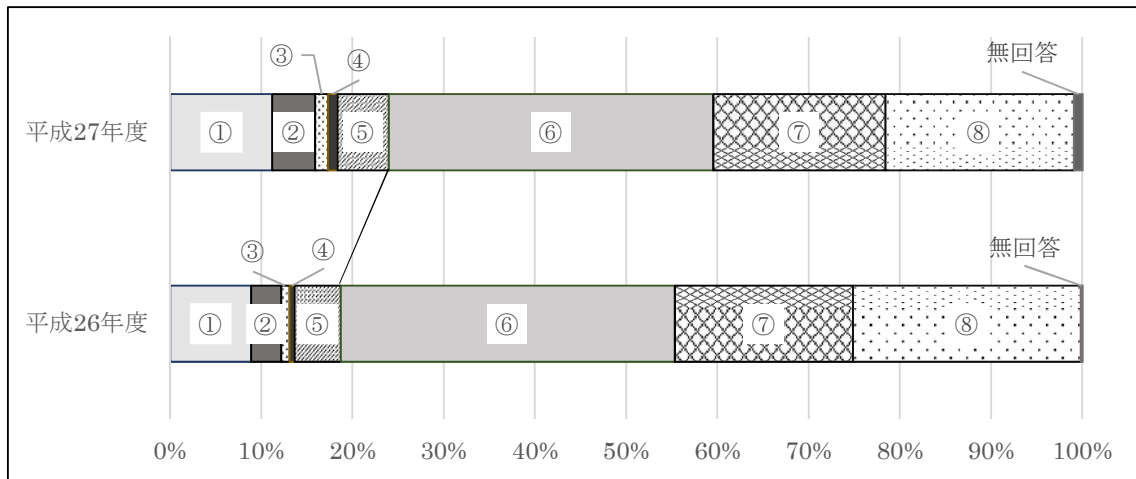
※本調査は国立・公立校を対象に行われたが、本稿では公立校のみを扱う。

国立校の傾向として、高得点層が多い、というスコア分布結果のほかに、英語が好き、英語活動の時間が多い、などの割合が高い傾向にある。

◆アンケート集計結果＜高等学校抜粋＞（平成 27 年度「英語教育改善のための英語力調査」より）

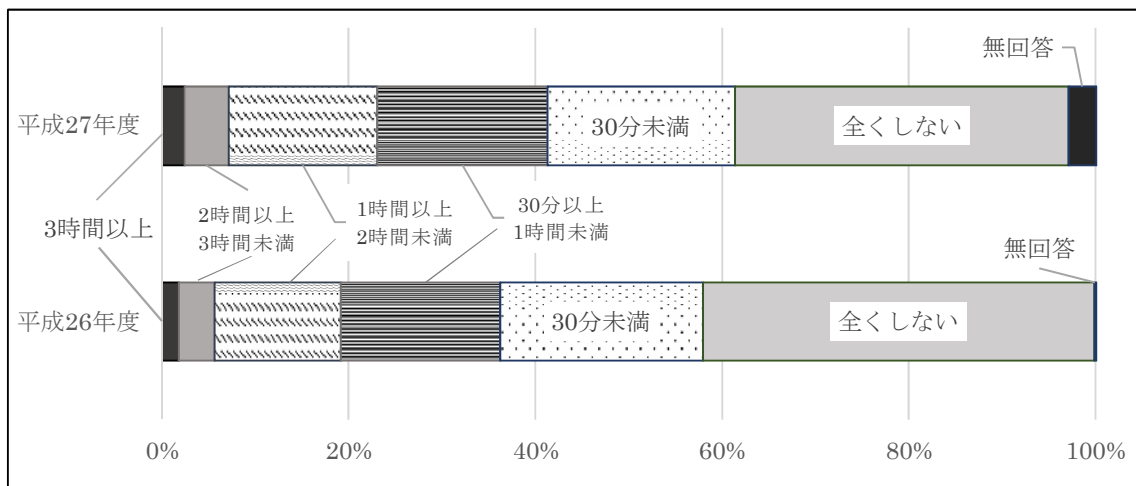
<Q：どの程度まで英語を身につけたいと思っていますか>

- ① 英語を使って国際社会で活躍できるようになりたい
- ② 大学での自分が専攻する学問を英語で学ぶことができるようになりたい
- ③ 高校卒業後に、海外の大学などに進学できるようになりたい
- ④ 高校在学中に留学して海外の高校の授業に参加できるようになりたい
- ⑤ 海外でのホームステイや語学研修を楽しめるようになりたい
- ⑥ 海外旅行などをするとき英語で日常的な会話をし、コミュニケーションを楽しめるようになりたい
- ⑦ 大学入試に対応できる力をつけたい
- ⑧ 特に学校の授業以外での利用を考えていない



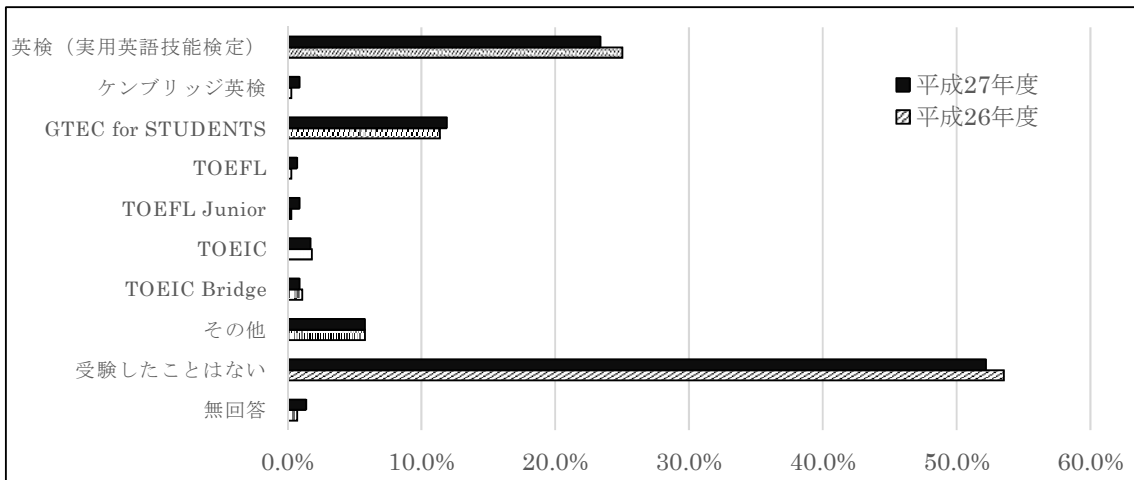
国際的に活躍したい、大学の専攻学問を英語で学習したい、留学したい、といういわば高度な英語力が必要となる明確な目的意識を持つ生徒の割合は、平成26年度調査結果より増えている。しかし、多くの生徒が、海外旅行での日常会話、大学入試への対応が目的であり、英語を「在学中しかやらない」生徒の割合を加えると7割以上になる。全員が高度な英語力を身につけるといふ目的を持つ必要はないが、グローバル化がさらに進むと予想される近い将来、現在よりも確実に、ある程度以上の英語能力が必要な場面が増えることを意識させることが必要であろう。

<Q：学校の授業や予習・復習以外に、普段（月～金曜日）、1日あたりどのくらいの時間、英語に接していますか（英語を聞く、読む、話す、書く、のいずれも含む）>



グラフは平日のものだが、学校が休みの日の調査結果を見ても、30分未満という生徒の割合はほぼ変わらずおよそ55%で、半分以上の生徒は授業及び予習・復習以外では、ほとんど英語に日常的に触れていない。ただし、前出の「英語をどこまで身につけたいか」の「授業以外の利用を考えていない」生徒がかなりな割合でいることを考え合わせると、妥当な結果だったのかもしれない。

<Q：高校生になってから、今回の試験以外に、英語に関する資格・検定試験を受験したことがありますか>（複数回答）

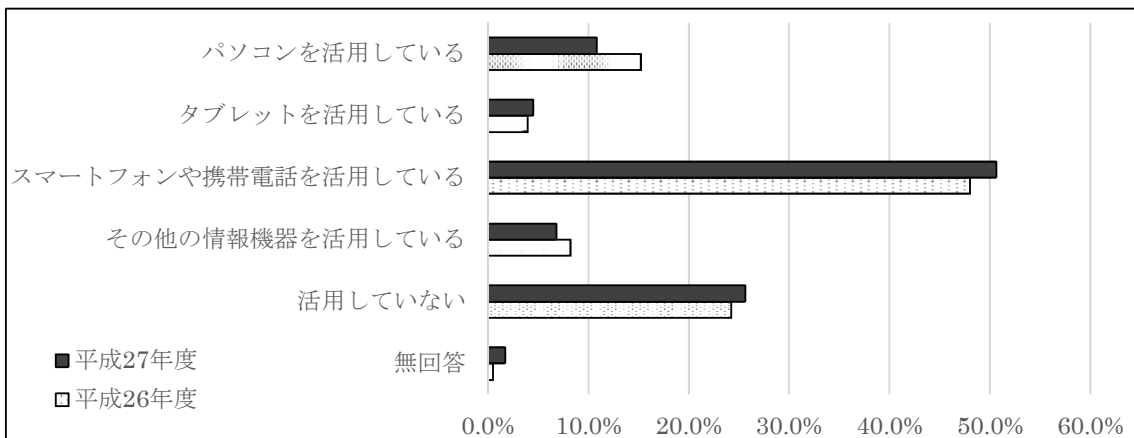


外部検定の中では英検受験者がとび抜けて多い。しかしそれでも 20 数%という程度で、何も受験したことがない生徒が半数以上となっている。受けていない理由は「必要性を感じていない」「自信がない」がそれぞれ 40%を越えている。

必要性という点については、外部検定は資格としての価値だけでなく、能力の進捗状況を客観的に見るバロメーターともなる。さらに、多くの高校生が英語学習の目的としている「入試」での活用も広がっている。一発勝負の一般入試に対して、年に数回の受験機会がある外部検定は、生徒の精神的な負担を大いに減らすことになる。高校生の中で、特に入試利用についての認知が広がっていけば、外部検定の受験者も大幅に増えるだろう。

また、自信が持てない生徒にとっては、試験問題が一律ではなく、能力に応じた級がある「英検」は選択肢の一つとなると思われる。

<Q：学校の授業以外で英語に接する際、パソコンやタブレット、携帯電話などを活用していますか>（複数回答）



平成 26 年度と比較し、パソコンの活用が減り、スマートフォンや携帯電話、タブレットの活用が増えている。スマートフォンについては、高校生の所持率が 93.6%（内閣府「平成 27 年度青少年のインターネット利用環境実態調査」より）という状況なので、この傾向は続くと思われる。

本調査結果では、生徒のスマートフォン、携帯電話の活用事例は掲載されていないが、インターネットでわからない情報を調べる、辞書機能として使う、単語やリスニングなどの学習アプリを使う、ということが考えられる。

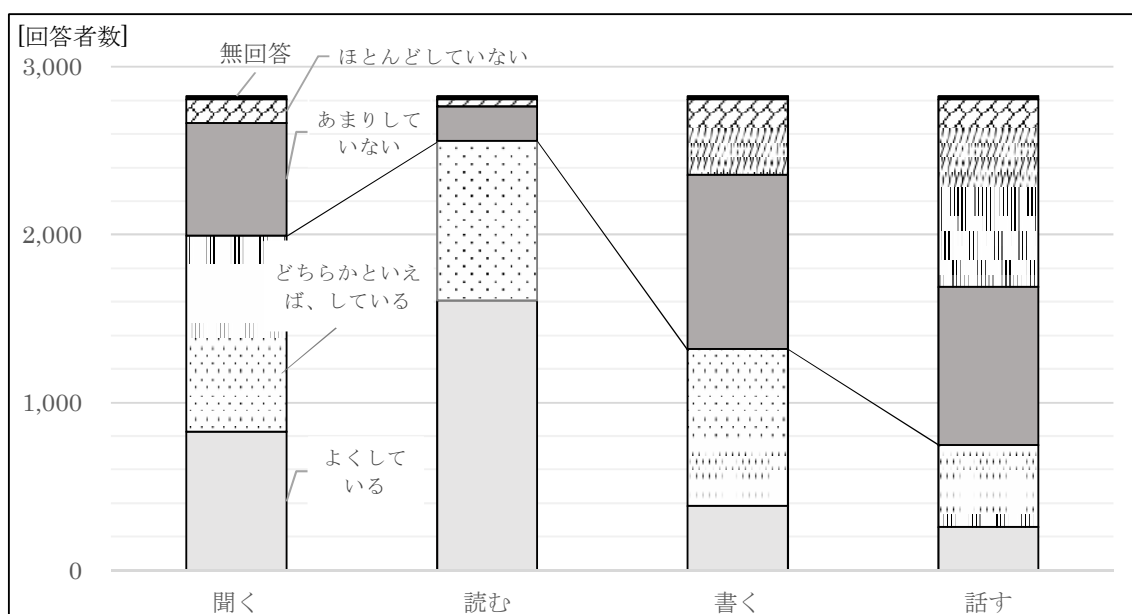
◆次に、同調査において、教員向けに行われたアンケート結果から、英語の授業で4技能別に指導している割合をみる。

直接的に、各技能の時間割合を尋ねる質問項目はなかったが、質問の内容から、「聞く」「読む」「書く」「話す」の指導と思われるものを抽出した。(平成27年度のみ集計)

◎次のグラフで「聞く」「読む」「書く」「話す」と表記した質問事項は以下の通り

- ・「聞く」…英語を聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする活動を行っていますか。
- ・「読む」…英語を読んで、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする活動を行っていますか。
- ・「書く」…聞いたり読んだりしたことに基づき、情報や考えなどについて、書く活動を行っていますか。
- ・「話す」…与えられた話題について、即興で話す活動をしていますか。

<Q: 各技能を主目的にした活動を行っていますか> (縦軸は回答者数)



「聞く」「読む」活動の授業時間の割合が高く、「書く」「話す」活動は、あまり行われていない状況がわかる。もっとも、「読む」授業の中で、他の技能を複合的に利用しての指導も当然あると思われるので、一概に、「書く」「話す」活動が少ないとはいえない。

ただ、ここで「技能別 英検準2級～2級程度以上の割合」(平成28年2月既報)をあわせてみると、それぞれの達成率が、「聞くこと」:26.5%、「読むこと」:32.0%、「書くこと」:

17.9%、「話すこと」：11.0%、となっている。達成率の低い能力育成のためにも、「書く」「話す」活動を主体とした授業時間の確保が必要だ。

◆ここからは、中学校のアンケート集計結果の特徴的なところをみる。

◆アンケート集計結果から（中学校）

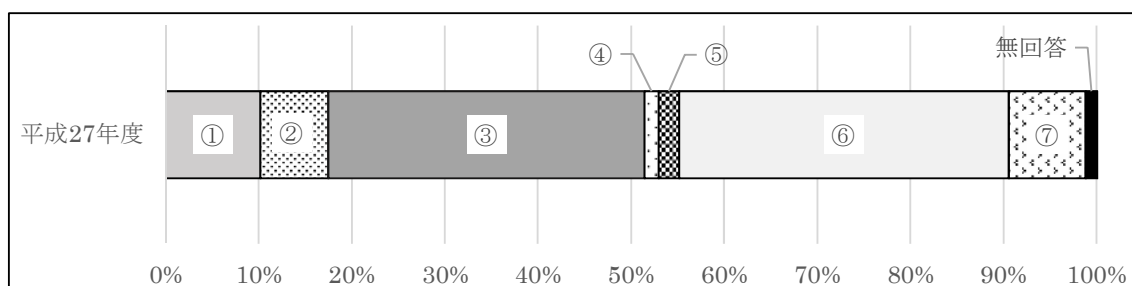
- ・英語の学習が「あまり好きでない」「好きではない」が高校よりも若干少なく、4割強。
- ・身につけたい英語力は「海外旅行での日常会話」「高校入試に対応」で約7割。
- ・外部検定を受験したことがない生徒は6割を越えている。
- ・英語でのスピーチ、プレゼンテーションは半数以上の生徒が授業で経験している。
- ・高校よりも「書く」「話す」活動を行う授業の割合が高い。

※高等学校と同様、グラフの数字は公立校のみを掲載。中学校でも、国立校の集計結果は、英語の学力分布、英語が好きであるという割合、学習時間、などの割合が高い傾向にある。

◆アンケート集計結果＜中学校抜粋＞（平成27年度「英語教育改善のための英語力調査」より）

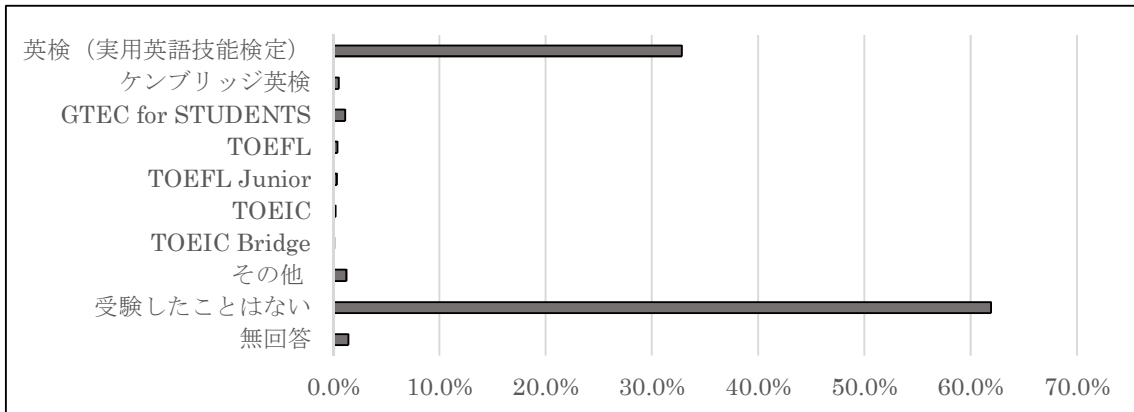
＜Q：どの程度まで英語を身につけたいと思いますか＞

- ① 英語を使って国際社会で活躍できるようになりたい
- ② 海外でのホームステイや語学研修を楽しめるようになりたい
- ③ 海外旅行などをするとき、英語で日常的な会話をし、コミュニケーションを楽しめるようになりたい。
- ④ 高校卒業後に、海外の大学などに進学できるようになりたい
- ⑤ 大学で自分が専攻する学問を英語で学べるようになりたい
- ⑥ 高校入試に対応できる力を付けたい
- ⑦ 特に学校の授業以外での利用を考えていない



中学生の段階では、およそ7割の生徒が、日常会話③や高校入試⑥のため、と考えている。今後、さらに高度な英語の活用に興味を持たせたり、少なくとも「英語の学習が好きではない」という生徒を増やさないために、継続して学ぶ興味を維持させることが必要であろう。また、中学校での学習が入試のためで終らず、高等学校、さらには大学での学習へ継続的になるよう入試の在り方も検討していくべきだ。中学校で4技能を学んだ生徒が、高校入試では2技能しか測定されず、入学後にまた4技能を学ぶが、大学入試では2技能しか測定されない、という学びの断絶が起こらないことを期待する。

<Q：中学生になってから、今回の試験以外に、英語に関する資格・検定試験を受験したことがありますか>（複数回答）

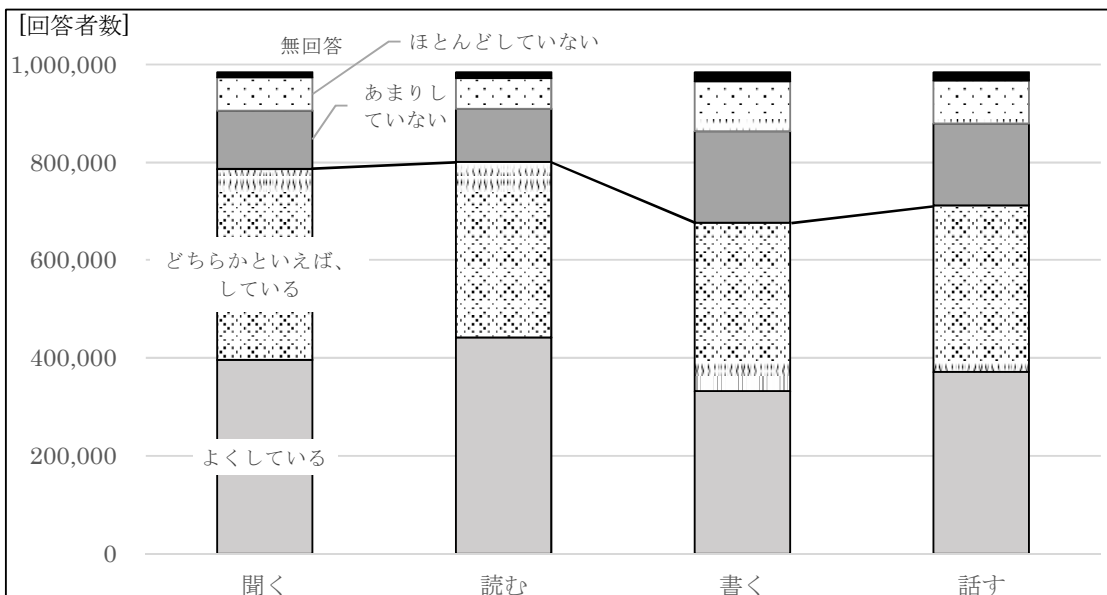


受験をしなかった理由では、「受験機会がなかった」：10.8%、「受験する必要性を感じない」：28.5%、「自信がない」：49.3%という結果が出ている。受験したことがある試験は、「英検」が圧倒的であった。認知度の高さはもちろんだが、学力に応じた級があることで、多くの生徒が受験できるメリットがあるのは大きな理由かもしれない。

◆次に、高校と同様に、英語の授業において4技能別指導状況の割合をみしてみる。

質問の内容から、「聞く」「読む」「書く」「話す」の授業と思われるものを抽出した。高校とは異なり、中学では教員ではなく生徒に調査を行っている。集計結果は第3学年時の回答を掲載。

<Q：各技能を主目的にした活動を行っていますか>（縦軸は回答者数）



4技能ともに比較的バランスよく授業がなされているようだ。高校と同様に、「技能別 英検3級程度以上の割合」（平成28年2月既報）とあわせてみると、「聞くこと」：20.2%、「読むこと」：26.1%、「書くこと」：43.2%、「話すこと」：32.6%となる。「書く」「話す」授業に時間を割当てることで、英語力の向上に結果が出ている。

中学校と高校の授業で大きく差が出ている項目が、「英語によるスピーチ、プレゼンテーション」をやっているかどうかだ。スピーチ、プレゼンテーションの授業をやっていたかどうか、という質問に対し、「そう思う、どちらかといえばそう思う」をあわせた割合は、中学校で約 60%、高校では約 35%だ。自分の意見を考え、まとめ、発表するという活動が、「書く」「話す」技能の能力育成につながっているのだろう。

国が教育現場での 4 技能化を進めるのであれば、入試を 4 技能化することが最も効力がある。グローバルな人材育成が多く大学の共通課題となっている今、大学側も入試の 4 技能化へ向けて動き始めている。この場合「外部検定利用入試」を導入するケースがほとんどだ。

しかし、大学のグローバル化へ向け、中心的な役割を担う「スーパーグローバル大学」でも、すべての大学で外部検定利用入試を実施しているわけではない。確かに外部検定を利用しなくても、独自に 4 技能入試を行うことは可能だが、それでもスーパーグローバル大学でさえ 4 技能入試は完全ではない。

●スーパーグローバル大学 平成29年度入試での外部検定利用状況(旺文社調査)

トップ型	推薦・AO	一般	けん引型	推薦・AO	一般
北海道大	●		千葉大	●	●
東北大	●		東京外国語大		
筑波大	●		東京藝術大		●
東京大	●		長岡技術科学大		
東京医科歯科大			金沢大	●	●
東京工業大			豊橋技術科学大		
名古屋大			京都工芸繊維大		
京都大	●		岡山大		
大阪大	●		熊本大		
広島大	●		国際教養大	●	●
九州大	●		会津大		
慶應義塾大			国際基督教大	●	●
早稲田大	●	●	芝浦工業大		●
			上智大	●	●
			創価大	●	●
			東洋大	●	●
			法政大	●	●
			明治大	●	●
			立教大	●	●
			立命館大	●	●
			関西学院大	●	●
			立命館アジア太平洋大	●	●

※大学院大学の、奈良先端科学技術大、国際大は割愛

高校入試においても、同様に 4 技能を測定する入学試験の開発、あるいは外部検定の導入の検討が待たれる。

先進例では、大阪府が平成 29 年度入試から、外部検定の成績を英語学力試験への読み替えをスタートさせる。また、東京都は「東京都英語教育戦略会議」における「英語教育の推進及びグローバル人材育成の具体的な方策」として、都立高校入試に、スピーキングテストを加えた入試方法の検討を始めるとしている。受験生の多さから、スピーキングテストの採点は実務上無理があるため、外部検定の導入が予想される。

中学生、高校生の多くが直面する入試が変わることで、授業の在り方、指導方法も変わっていくと思われる。それに伴う教員のスキルアップも重要な要素となってくるだろう。